父母の養育態度の形成とその評価に関する研究

高橋　種昭（日本女子大学）
高野　　陽（国立公衆衛生院）
小宮山　要（科学警察研究所）
新道　幸恵（国立公衆衛生院）
大日向雅美（彰栄保育専門学校）

研究目的

子どもの心身の発育・発達に，親の養育態度が果す役割の大なることについては今更言うまでもないが，最近では未熟な親や父性・母性不在などの問題が，乳幼児健診の場でもしばしば問題になっている。そうした親の養育態度にみられる歪みにはできるだけ早期の対応が必要である。そのためには，現在の家庭における親子関係や育児の実態の把握と共に，養育態度の形成というものがどのような形なり，経過の中で行われるか，という基礎的な研究や，更にその研究成果に基づいた養育態度を如何様に評価するか，その評価の方策に関する研究がぜひとも必要であろう。

今回の研究は，そうした要請に応えることを目的としたものであり，父母の養育態度の形成について明らかにすると共に，その評価方法について考察するものである。

研究方法

今年度の研究は，その第一段階として，従来あまり研究がなされていなかった父親に焦点をあて，現在の父子関係なり，家族の中における父親の役割や，父性としての在り方などについて明らかにすることにした。

研究方法としては，次の3種類のものによった。

Ⅰ．文献による父子関係についての考察

Ⅱ．質問紙による調査

　その1．医療従事者を対象にした父親に関する調査

　その2．父親の養育態度等に関する調査

Ⅰ．文献による父子関係についての考察

家庭環境や親子関係が子どもの発達に及ぼす影響力については，その重要性が認識されるとともに，これまでに既に膨大な心理学的研究がなされてきた。しかし，従来の研究の大半は母子関係を対象としたものであり，父子関係そのものに焦点を当てた研究が開始されたのはここ十年余のことである。育児は女性の適性とみなし，子どもの発達にとっては母親が最も重要だとする認識が一般に根強く存在していたこと，さらに父親を調査対象として資料を直接入手することが困難であるという方法論上の理由も加わり，父親研究を低調なものとしてきたといえる。

母子関係を偏重した親子関係の究明のあり方を問題視する動きは，アメリカにおいては既に1960年代前半にみられている。まず1960年にアメリカ心理学会が「家庭における父親の役割と影響」と題するシンポジウムを開催している。また1965年にはNash, J.が父親研究の文献レヴューを通して，父親研究の貧弱さを指摘し，父親研究の必要性を主張している。しかし，その後も父親研究は依然として低調で，断片的，付随的に行われていたにすぎない状態が続く。本格的な取り組みがなされ始めたのは1970年代後半から1980年代にかけてである。まずLama, M. E.による編著“The Role of the Father”が1976年に出版され，5年後には同名タイトルの第二版も出版されている。これと前後して，Lynn, D. B. (1974), Pedersen, F. A. (1980), Park, R. D. (1981), Lamb, M. E. & Sagi, A. (1983) らの刊行が続く。これらは主として父親に関する包括的な概論書であり，父親役割に関する認識の歴史的変遷，子どもの性役割や道徳性，知的な発達と父親存在との関連性，父親不

在が子どもに及ぼす影響，父親役割の文化的特殊性及びその普遍性，等々が論じられている。また，Parentingあるいは Parenthoodというタイトルを掲げたもの（例．Hoffman, L. W. (eds.) 1982，Cohen, R. S. (eds.) 1984）の中で，父親や父親役割が母親や母親役割と同等に扱われている。この他，Child Development, American Journal of Orthopsychiatry, Merrill Palmer Quarterly, Journal of Marriage and the Family, Sex Roles等の諸雑誌において，父親に関する実証的研究の掲載の増加が注目される。

このように近年，アメリカにおいて父親研究が盛況となってきた背景には，離婚の増大に伴う母子，父子世帯の増加といった家庭崩壊現象が切実な社会問題となっていることが考えられる。そうした家族問題への対処としては，母親の機能にだけ委ねることが限界となり，父親の存在と機能に関心が寄せられたといえる。また，女性の社会参加が推進され，男女の性別役割分担を再検討しようとする気運が高まったことも，別の観点から家庭内での男性の存在に注目を集めた一つの要因といえよう。従来，労働に奔走することを余儀なくされてきた男性に対して，親として，家庭人として，人間としての側面の回復が指摘され始めた (Friedan, B. 1981)。性別役割分担にも徐々に変容の兆しがみえつつある中で，家事や育児の領域における男性の能力や機能が問われ出したことも，父親研究の活性化をもたらした要因といえる。

同様の現象は程度に差こそあれ，また時期的なずれはあるものの，ここ数年我が国にも認められるものである。上述の概論書のいくつか（ラム1981，リン1981，ペダーセン1986）が翻訳され，アメリカにおける父親研究の実情が伝えられているとともに，父親に対する関心の高まりを招く契機をなしている。アメリカだけではなく，ドイツの von Canitz (1980) の父親論も翻訳 (1981) されている。また，1980年には日本教育心理学会において「乳幼児の発達と父性の役割」と題したシンポジウムも開催され，学会発表でも父親研究が徐々に増加しつつある。内外の文献総覧も既にいくつか出されている（柏木恵子1978，古市裕一1978，斎藤浩子1984，大日向1986）。

ここ十年余という比較的短い期間の中で，アメリカの父親研究が盛況を呈してきており，そそ余波もあって我が国にも父親研究の必要性の認識が高まっていることは，上述の通りである。しかしながら，現段階では父親の役割や機能に関して定見を得るところには，未だ至っていないというのが実情のようである。また，アメリカにおける父親研究の知見は，今後の我が国の父親研究に参考となる点が多いことは事実であるが，一方，社会的・文化的背景の違いを考えるとき，我が国独自の仮説に立脚した父親研究の必要性にも目が向けられていくべきではないかと思われる。

従来のアメリカでの父親研究を概観すると，主として1970年代前半までの父親研究からは，子どもの性役割の発達や道徳性の発達，知的機能の発達に父親が重要な機能を果たしているという知見が提出されている。そこで父親の機能は，男性的特徴を備えた社会的規範の体現者である点に求められており，Parsons, T. (1954) のいうシンボルとしての父親の機能と合致するものである。

父親を社会的価値や規範の体現者とみなし，子どもの社会化を促することが父親の本来的機能とする知見は，父母間に育児上の分担を肯定する考え方につながるものであるが，我が国の父親論議にも少なからぬ影響を及ぼしているといえる。現代が父親なき社会であることは，Mitscherlich, A. が1963年に指摘して以来，我が国でも父親に対する一つの定着した見方となっている。父親不在とは父親が父親としての機能を喪失していることを意味するが，そこでの父親の機能は価値や規範の体現と子どもの社会化を促す権威をその内実として論じられている。例えば有地享（1981）は，職住分離を前提とした現代の産業社会の「就業構造上の制約」と働く主婦層の増加による「女権向上」の二つが，権威と存在価値を弱体化させた父親や母親化した父親を輩出させていることを指摘し，これをもって今日を父親不在の時代とみなしている。「男性的役割と女性的役割の均衡ある分担」（有地）の提唱や昨今の父権回復論は，権威や強さ

に代表される男性的特徴や価値の体現を通して子どもの社会化を促すことが，父親の本来的機能とする点で立場を共通にするものである。

しかしながら，社会的価値や規範の体現あるいは社会化の促進が，はたして父親独自の本来的機能であるのかについては，今一度検討する必要があると思われる。上述の通り1970年代前半までの父親研究は，母子関係偏重の研究動向の中で付随的，散発的に行われたものが多く，父親の機能に関しても社会化に焦点を当てて操作的にみたものが大半であった。父親行動の分類や多様性の研究に基づいて父親の機能が検討されたものではない点をかえりみるべきであろう。また，女性の高学歴化や就労などによる社会参加が日常化している今日では，価値規範の体現や社会化の担当を父親独自の機能とする観点で父母間の育児上の分担を肯定することの是非についても，生活実態との乖離がないか，慎重な検討が必要と思われる。

父親の機能や役割に関しては，父親の具体的な行動や役割意識を実証的に究明する過程で考察がすすめられていくべきであろう。1970年代半ば以降，1980年代にかけて，乳児研究や相互作用研究が隆盛となる中で，父親の具体的な育児行動そのものが対象となり，母親との類似点，相違点も徐々に検証され始めている。しかし，これまでのところ諸知見は必ずしも一致をみるに至っていない。例えば父親は母親と同様にペアレンティングが上手で（Greenberg, M. & Morris, N. 1974），応答的（Parke, R.D. & O'Leary, S. 1976）だとする知見がある一方，子どもに対する反応や遊び方，身体的接触に相違を認める知見（Lewis, M. & Weinraub, M. 1974, Berman, P.W. 1976, Kotelchuck, M. 1976, Lamb, M.E. 1981）がある。しかし，これらの知見を子どもの発達に伴う時間的推移の中で捉えてみると，概して親子関係の最初期においては，父母間の育児行動や育児能力に類似性が大きく，その後，時間の経過とともに父母間に相違が生ずるという傾向が認められる。このことは父母の役割分担，とりわけ父親の役割と機能は，世俗的な傾向や文化的期待によって方向づけられることを示唆するといえよう。

父親の役割，機能が社会的要因に影響される点を考えるとき，父親研究は社会的・文化的文脈の中でその位置づけを確かにするアプローチが求められるはずである。性別の類型化に関する態度は，ここ十数年の間に大きく変遷している。かつての伝統的性別役割分担に基づいた社会を背景として把握された父親の機能を，そのまま今日の父親研究を分析する視点として踏襲することは妥当性に欠けるであろう。

また，我が国の家族関係は親子関係，とりわけ母子関係が夫婦関係や父子関係に優先して一次的重要性を有している点に特徴がある。従って，現代の産業社会がもたらした父親不在や，昨今の単親家庭における父親欠損も，欧米に比べて，さ程深刻な影響を直ちにもたらすものではないことも考えられる。むしろ，慢性化した父親不在状況が過度に密着した母子結合を形成し，それがさらに父親疎外をもたらすという悪循環が，長い間にわたって形成されてきている。我が国の父親不在状況は，父親が単に権威や男性的特徴を回復することで解決されるものではなく，夫婦関係を含めた triadic な系として家族を捉える中で，父親存在や父子関係の問題点を明らかにするアプローチがなされなければならない。欧米の家族関係は，主として夫婦関係をドミナントとしており，その中で父親には男性的特徴の体現が尊重されている。我が国の家族関係との相違は大きく，また父親の男性的特徴についても，我が国の父親の権威や力の内実は，歴史的に欧米のそれと様相を異にしていることも指摘されている（中根千枝1974，佐々木孝次1982，大日向雅美1986）。欧米の家族関係や社会を背景とした仮説に依存した父親論議は，我が国の父親存在の究明としては実証性に欠けることが懸念される。

今後の父親研究は，我が国の社会的・文化的特殊性を反映した仮説に準拠して行なわれていくことが必要である。しかし，この点については未だこれからという段階に止まっている。本研究は上述の問題意識をもって開始されたものであり，今日の父親存在の意義と機能およびその問題点を明らかにするとともに，最終的には我が国の父親存在を把握するうえでの枠組ある

いは視点を模索できればと考えている。しかし，そのためには父親が育児のどのような領域で，どの程度関与しているかという実態が把握されねばならない。父親の行動の分類や多様性を掌握して初めて，その中から家族関係や就労形態の特殊性と深く関連している父親行動を抽出することが可能であり，それが子どもの発達や家族関係と相互に関連して編み出す問題点についての検証へとつながるものである。父親から資料を得にくいという方法論上の難しさは，依然として続いており，父親の育児行動の実態は必ずしも充分検討されていない。従って，初年度はまず父親の育児行動についての鳥瞰図的な把握を目的とした。その結果，焦点があいまいとなった点は免れないが，その中から今後，取り上げるべき行動指標について検討するための資料が得られたと考える。次年度は抽出した行動指標について，就労形態別の検討や夫婦関係との関連性，子どもの発達との相互連関等について，検討をすすめていく予定である。

Ⅱ. 質問紙による調査

その1. 医療従事者を対象にした父親に関する調査

1. 調査目的及び調査方法

本調査は，小児保健の現場で実際に子どもの健診や医療活動に従事している人々のみた現在の父親像と，父親に対する指導や働きかけの実態について，質問紙によって調査したものである。

調査の対象とした医療従事者は，東京の研修機関で研修中の医師，保健婦，看護婦，助産婦と，東京，神奈川，新潟，富山などの都県の保健所に勤務する医師，保健婦など計78名である。その内訳は，医師13名，保健婦45名，看護婦15名，助産婦5名である。

質問項目は以下の如きものである。

1. 父親の子どもとのかかわり方
2. 母親の父親(夫)への期待
3. 医療職としての父親への期待
4. 保健指導の中での父親の指導
5. 父親教室

この中で1～3については，乳児，幼児，学童の3段階に分けて，父子のかかわり方について質問した。

2. 調査結果

問(1)の現在の父親がどのような形で子どもの育児や家事などにかかわっているか，ということについては，乳児期の子どもをもつ父親においては，全く育児や家事に参加しないというケースは極めて少なく，大部分の父親は，全面的か，部分的にかかわっているという報告が圧倒的に多い。つまり，全く育児や家事にかかわらない若い父親は現在では非常に少ないわけである。部分参加の父親の多くは，休日のみというものと，入浴のみというものであり，育児では，食事や排泄の世話より入浴の面倒をみる父親が多い。

幼児をもつ父親では，子どもの遊び相手という形で育児に参加しているものが多いが，通勤に長時間かかる首都圏の団地の父親の場合など，その遊び相手の時間は休日にみな限られており，平日の接触は極めて少ないのが実状である。

学童の場合では，父親はP.T.A.や地域の子ども会の手伝いのような仕事にも多く参加しているが，幼児や乳児の場合より逆に，その殆んどを母親委せ，という父親が学童期の子どもをもつ父親には多くなっている。これは一つには子どもが遊び相手を家族より友人に求めるようになることにもよるし，父親が年齢的にも職場において責任ある多忙な地位につくこともあって，子ども相手に過ごす時間が少なくなるためとも考えられる。

問(2)の母親達の父親（夫）への期待については，やはり乳児をもつ母親の場合，全面的な育児や家事への参加を父親に期待するものが多くみられる。しかし，同時に直接的な参加でなく，精神的な援助や支えがあればよしとする母親も少なからずおり，全ての母親が父親の育児や家事への全面参加を望んでいるわけではない。

幼児では，父親が子どもの遊び相手になって欲しいというのは殆んどの母親の期待であり，父親の子どもの遊び相手としての役割に対する要求なり，期待は，現在では殆んど定着しているといえよう。その他では，子どもに関する事の相談相手になって欲しいという期待や，しつ

けについても分担して欲しいという要求がみられる。

学童では，父親として母親にはできない役割を果して欲しいというように，父親のもつ男性としての役割に対する期待が大きくなっている。

問(3)の医療職として父親へ望むものとしては，乳児をもつ父親へは，育児や家事への全面的な参加なり，協力を期待しているものが他の年齢時期より多くみられる。やはりこの時期の母親の負担の大きいことや，最初の時期における父子関係の重要性を医療職の多くの人が認めているために，こうした答が多くみられるのであろう。

幼児期の子どもをもつ父親へは，母親の期待と同じように，遊び相手としての役割に対する期待が強くみられる。また，しつけの面における協力に対する期待も強い。しかし，医療従事者の多くの人の父親への期待をみると，育児の主役はあくまでも母親であり，父親には協力者としての役割を期待しているものが現在の段階ではまだまだ多いということがいえる。

問(4)の保健指導の場での父親への実際的な指導についてみると，乳児をもつ父親には，その協力を強く要請し，入浴や食事などを通じての直接的な父子のふれ合いの重要性を認識させようという働きかけがどこの現場でも多く行われている。幼児期以降では，やはり「男性としての父親」に対する期待がその指導にもはっきりと出ており，父親でなくてはできない遊びやしつけの担当者としての役割を果すような指導が多く行われている。

問(5)の父親学級については，父親だけを対象にした学級は少なく，その殆んどは両親を対象にした学級の中での父親教育である。中にはパパセミナーというように，父親のみを対象にした学級が開かれている所があるが，参加者は少なく，数名のみである。父親学級などに出席する父親の全ては，当然の事ながら育児やしつけにも熱心であり，意欲も旺盛であるが，問題はこの場合も非協力的な，不熱心な父親をどのように教育の場に参加させるか，ということである。また，父親学級の内容は，家族計画や育児実習のようなものが殆んどであり，父性の在り方を問うようなものは殆んどないのが現状である。

以上の結果から，現在，小児保健や医療の現場の人々の目からみた父親の多くは，過去の父親と異なり，何等かの形で乳幼児の育児に直接的にかかわっており，その指導も乳幼児期における父子関係の重要性の強い認識の上に立った指導が行われているということがいえる。しかし，一部で言われているような，父母が全て同じような形で育児や家事へ参加すべきである，というような認識なり，意見は，医療従事者の場合にも多くはみられず，それぞれの役割を緊密な協力の下に果すことを望むものが過半数を占めているのが現状である。とくに父親の母親（妻）への理解・いたわりの必要性を強調するものが多くみられた。

その2. 父親の養育態度等に関する調査

1. 調査目的

父親の家庭における姿や子供への関わり方の実態を明らかにする。

2. 調査方法及び内容

1）調査方法・対象：東京都内にある職場に勤務する父親約300名に質問紙調査を郵送法或は留置法を用いた。

2）調査内容：父親の年齢，職業，母親の職業の有無，子ども数等の背景の他に，家事，育児，教育・しつけ等への参加・協力状態や子どもの叱り方，子どもの事で嬉しい（かった）事などの子どもへの関わり方，子供についての理解度等である。これらの内容のうち主なものについては，乳幼児期から中高校生時代までの子どもの発達段階別に第1子と末っ子の事について調査した。

3. 結果並びに考察

回収数190（回収率63.3％）について集計し，必要に応じてχ^2検定を行った。

1）対象背景

父親の平均年齢は42.7歳であり，年齢別の人数は表1のとおり，30～40歳代で約70％を占めている。

父親の職業については，表2のとおり，会社員（非管理職），会社員（管理職），公務員は，

表1　父親の年齢構成

年　　齢	人　数	率 (%)
20 ～ 29	12	6.3
30 ～ 39	60	31.6
40 ～ 49	69	36.3
50 ～ 59	47	24.7
60 ～	2	1.1

表2　父親の職業構成

職　　業	人　数	率 (%)
会社員（非管理職）	50	26.3
会社員（管 理 職）	54	28.5
公　務　員	50	26.3
自　営　業	17	8.9
自　由　業	7	3.7
そ　の　他	11	5.8
不　　明	1	0.5

ほぼ同じ割合であり，それらを合計すると約80%を占めている。

母親（妻）の職業の有無別では，職業なしが多く62.1%（118）であり，常勤者が22.1%（42）である。父親の年齢が若いほど母親が職業を持っている場合が多い。

子ども数の平均は2.2であり，子どもが1人のみの父親は21.1%（40）である。なお，子どもの平均年齢を子どもの順位別にみると第1子は12.4歳（0～28歳），第2子は11歳（0～24歳），第3子は10.2歳（0～23歳）である。

2）家事，育児，教育・しつけに対する参加・協力状態

父親の家事，育児，教育・しつけに対する参加・協力状態を，「いつもする（した）」，「時々する（した）」，「休日のみする（した）」，「全くしない（した）」に分けて質問した。その結果，図1，2，3のように，父親の参加・協力の良いものから順にあげると，育児，教育・しつけ，家事の順である。それらの協力状態は，全般的に，子どもが大きくになるにつれて，また第1子よりは末っ子の方が，悪くなる傾向がみられる。

図1　父親の炊事協力状態（子どもの発達段階別）

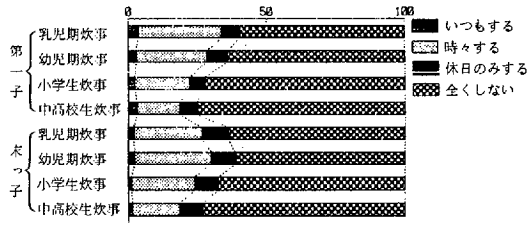


図2　第1子幼児期の父親の家事，育児，しつけ参加状態

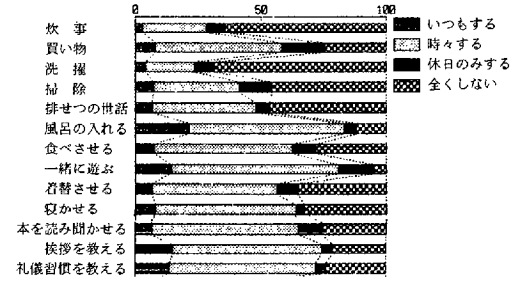
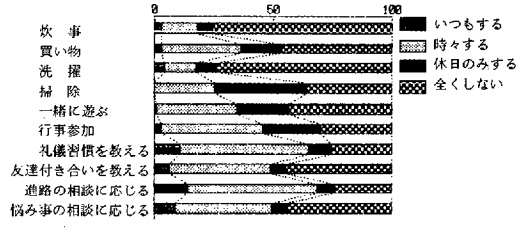


図3　中高校生の父親の家事，育児，教育参加又は協力状態



家事，育児，教育・しつけの各領域の内容別に協力状態を見ると，家事では，買物への協力は良く，炊事，洗濯への協力は悪くなっている。育児では，風呂にいれる，あやす・抱く，一緒に遊ぶ等の協力状態はよい方であるが，おむつの交換や排泄の世話に対する協力状態はあまり良くない。教育・しつけでは，子どもの発達段階によって異なり，乳児期，幼児期には挨拶を教える，小学生の頃は礼儀習慣を教える，中・高校生の頃は進路の相談に応じる，などの教育・しつけへの参加・協力状態が良くなっている。

3）家事，育児，教育・しつけに対する参加・協力状態に関連するもの

父親の家事，育児，教育・しつけに対する参

表 3　父親の家事参加・協力状態への関連要因

子どもの順位 / 子どもの成長段階 / 項目	第 1 子			末子				
	乳児期	幼児期	小学生期	中高校期	乳児期	幼児期	小学生期	中高校期
炊事	母親の職業 父親の年齢	母親の職業				母親の職業	母親の職業	
買物	母親の職業 父親の年齢	母親の職業 父親の年齢	父親の年齢					
洗濯	父親の年齢	母親の職業		母親の職業				母親の職業
掃除	母親の職業	母親の職業	母親の職業		母親の職業	母親の職業		

＊内の文字は関連要因（P〈0.005）を示す。空欄は関連要因がないことを示す。

表 4　父親の育児参加・協力状態への関連要因

子どもの順位 / 子どもの成長段階 / 項目	第 1 子		末子	
	乳児期	幼児期	乳児期	幼児期
おむつ交換排泄の世話	母親の職業 父親の年齢		母親の職業 父親の年齢	父親の年齢
風呂にいれる	父親の職業		父職の職業	
食事（ミルク）をさせる		母親の職業		母親の職業
一緒に遊ぶあやす抱く	母親の職業 父親の年齢	母親の職業 父親の年齢	母親の職業	母親の職業
衣服の着脱	母親の職業 父親の年齢	父親の年齢	父親の年齢 父親の職業	父親の年齢
寝かせる			母親の職業 父親の職業	
保育園等の送迎		母親の職業 父親の年齢 ・職業		母親の職業

＊内の文字は関連要因（P＜0.005）を示す。空欄は関連要因がないことを示す。

表 5　父親の教育しつけに対する参加・協力状態への関連要因

子どもの順位 / 子どもの成長段階 / 項目	第 1 子			
	乳児期	幼児期	小学生期	中高校期
本を読んで聞かせる		母親の職業		
挨拶を教える	父親の年齢			
礼儀習慣を教える	父親の年齢			
友達付き合いを教える				
進路の相談に応じる				父親の職業
悩み事の相談に応じる			父親の職業	父親の職業

＊内の文字は関連要因（P＜0.005）を示す。空欄は関連要因がないことを示す。

加・協力状態と父親の背景との関連性をみてみると，父親の年齢，職業，母親の職業の有無等との間に表3，4，5のような統計的に有為な関連性が認められた。

家事では，父親の年齢が若く，母親の職業があり，公務員・自由業などの職業の，父親の方がそれらの背景のみられない父親よりも協力状態が良い父親が多いことが認められた。

育児への協力状態では，父親の年齢と母親の職業との関連性については，家事と同様な傾向であった。父親の職業との関連性は育児の内容によって異なり，「風呂にいれる」や「衣服の着脱」は公務員や自由業が，「寝かせる」は自営業や非管理職の会社員が，保育園等の送迎は自由業や非管理職の会社員が，他の職業の場合よりも協力状態が良い父親が多い。教育・しつけへの協力状態と父親の背景との関連性では，教育等の内容によって異なり，乳児期に挨拶や礼儀習慣を教えるのは比較的若い父親であり，幼児に本を読んで聞かせるのは母親（妻）が職業のあるよりもない父親の方が多い。小学生の悩みごとの相談に応じるのは，他の職業よりも公務員の父親の方が，中・高校生の進路の相談に応じるのは会社員（非管理職，管理職）や公務員の父親の方が他の職業の父親よりも，管理職である会社員の父親は他の職業の父親に比べて中・高校生の悩みの相談に応じるものが少ない。

4）子どもへの関わり方

叱り方を怒鳴る，殴る（叩く），けなす，無視する，罰を与える，さとす等に分け，それらをどんな時に用いるかを質問したところ，どの様な場合も，「さとす」が最も多くみられる。次に多い叱り方は，乳児期，幼児期の子どもがよく泣くに対しては「無視する」であり，幼児期，小学生や中・高校生の子どもが言うことを聞かない，行儀が悪いや小学生，中・高校生の子どもが整理整頓をしないに対しては「どなる」である。

叱り方と父親の年齢・職業，子どもの数や順位との間には関連性が認められない。しかし，母親が職業がある場合には，ない場合よりも乳児のよく泣くに対しては怒鳴る，小学生の男（女）の子らしくないに対しては叩く，けなす，末っ子の小学生の整理整頓しないに対してはけなす，殴る，罰を与える，末っ子の中・高校生の行儀が悪いに対して怒鳴る，けなす，父親が多くみられる。

父親として一番嬉しかったことを自由記述方式で質問したところ50～70％の回答があり，歩いた，言葉を話した，入学や進学をした，スポーツ大会やピアノ他の発表会で表彰された，自らの意志決定により行動選択をしたなどの子どもの成長発達の発見への喜びが記述されていた。それらの内容は，第1子，末っ子ともに同様の傾向がみられる。

5）子どもに対する理解

父親の子どもへの理解度をみたところ，表6のように，第1子，末っ子の，性格，食べ物の好き嫌い，好きなテレビ番組等について知っている父親は多いが，将来の志望や遊び方を知っている父親は少ない。これらの事と，父親の背景との関連性をみたところ，第1子の成績については年齢の高い父親ほど知っているものが多く，末っ子の友人の名前，性格の長所・短所，成績等についても年齢の高い父親ほど知っているものが多い。

表6　父親の子どもに対する理解

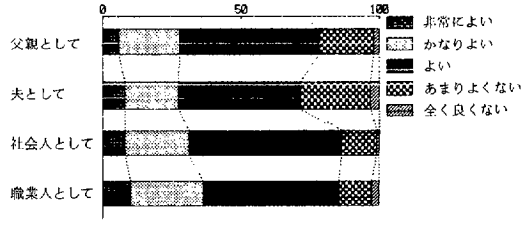
知っている父親数 ／ 項目	第1子	末っ子
	人数（率）	人数（率）
食べ物の好き嫌い	164（86.3）	118（78.7）
性格の長所短所	162（85.3）	119（79.3）
好きなテレビ番組	137（72.1）	106（70.7）
友人の名前	128（67.4）	82（54.7）
最近の遊び方	117（61.6）	91（60.7）
成績	115（60.5）	81（54.0）
将来の志望	89（46.8）	43（28.7）

＊第1子の場合は190を100％とし，末っ子の場合は2人以上の子どもをもつ父親数の150を100％とした。

6）自己評価

父親に対して，いろいろな役割に対する自己評価を非常によいから全く良くないまでの5段階の尺度を設け質問したところ，図4のように，

図4　父親の自己評価



全般的に自己評価の悪い人は少ない。役割別に評価の内容をみると，職業人，社会人としての自己評価が良い人が多く，父親としての自己評価の良い人はそれらに比べて少ない。

父親の家事，育児，教育・しつけへの参加や協力状態や，子どもへの関わり方には，父親の世代間の相違のみとではなく，父親の職業や，母親の職業の有無，第1子か末っ子かの子どもの順位や子どもの年齢などとの関連性が認められた。

しかし本調査結果には，父親に対する質問紙調査による限界がある。家庭内における父親の姿を明らかにするためには，母親，子どもをも対象にした調査をし，本調査結果に照らして検討する必要があろう。更に，父親の家庭生活のみならず，社会生活をも調査して，それらとの比較検討をすることによって，父親像をより明らかにすることが出来よう。

以上，今年度の研究結果からも，現在の父親達は，過去の父親に比べて家庭の中で育児や家

事に多く参加していることは明らかである。しかし，その参加の方法や度合は，父親の職業，年齢，妻の職業の有無などによっても異っているし，子どもの出生順位や数によっても違いがみられ，そのことを一律に論ずることはできない。また，父親の育児や家事への参加の仕方や度合などについて，指導する側の人々の考え方や態度にも違いがあり，必ずしも同じような内容の指導が行われているとは言えない。

このような結果からも，今後更に家族全体の中で父親というものをとらえ，父子関係の発達や，その役割のあるべき姿などについて考察を進めると共に，指導方法についても充分な検討が必要と考えられる。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

子どもの心身の発育・発達に,親の養育態度が果す役割の大なることについては今更言うまでもないが,最近では未熟な親や父性・母性不在などの問題が,乳幼児健診の場でもしばしば問題になっている。そうした親の養育態度にみられる歪みにはできるだけ早期の対応が必要である。そのためには,現在の家庭における親子関係や育児の実態の把握と共に,養育態度の形成というものがどのような形なり,経過の中で行われるか,という基礎的な研究や,更にその研究成果に基づいた養育態度を如何様に評価するか,その評価の方策に関する研究がぜひとも必要であろう。

今回の研究は,そうした要請に応えることを目的としたものであり,父母の養育態度の形成について明らかにすると共に,その評価方法について考察するものである。